

磯根漁業の確立を目指して

— ルーキーダイバー達の挑戦 —

相馬双葉漁業協同組合新地支所
青壮年部 小野典重

1. 地域と漁業の概要

相馬双葉漁業協同組合新地支所は、福島県最北部、宮城県との境にある新地町に位置しています。組合員数 88 名、漁船数は 57 隻余りでカレイ類を主な対象とした固定式さし網漁を中心に、コウナゴ、メロードやサヨリなどの船曳網、タコカゴ漁なども盛んで港には多様な魚種が水揚げされている。平成 15 年度の年間水揚額は約 4 億 6 千万円で、数年前に比べ 3 割近く減少しており、厳しい経営状態となっている。

2. 活動グループの組織と運営

青壮年部は部員総数 27 名で、役員は部長、副部長、会計を含めて 7 名で構成され、新地町主催のイベントでは毎年海産物の販売や漁船パレードなどに参加し、魚食普及や地域活動に取り組んでいる。また、ホタテの養殖試験やクルマエビの源式網操業試験など新規漁業の開発にも取り組んできた。

3. 実践活動課題選定の動機

当支所は、カレイ類を主な対象とした固定式さし網やコウナゴ、メロードやサヨリなどの船曳網漁業、タコカゴ漁など漁船漁業を中心に発展してきた。しかし、最近の底魚資源の悪化や隣県との入会問題などによる漁場の減少、不況による魚価の低迷などから水揚額は年々減少傾向にある。この対策として、閑漁期などに効率的な操業を行い、漁業経営の底支えにつなげられる漁業はないか検討され、これまで当支所ではほとんど行われていなかった磯根漁業の開発について取り組むこととなった。

4. 実践活動の状況及び成果

当地区では磯根漁業の実績がほとんど無いため、磯根漁業に適している場所を探す漁場調査から始められた。平成 9 年 8 月に水産試験場の協力のもと、新地地先の磯で潜水による目視観察と枠取り調査が行われた。この結果、「タカオレ」と呼ばれている磯がアワビやウニの餌に適しているアラメの海中林が存在し、かつ適度な潮流もあることが分かり、ここを試験区に選定してアワビ種苗放流試験が実施された。第 1 回目の放流は、平成 9 年 10 月に行われ、福島県栽培漁業センター産の殻長約 3cm のアワビ種苗 3,000 個を放流した。放流から 3 ヶ月後の追跡調査では、61 個体が再捕され、殻長は最大で 10 mm、平均で 5.3 mm と非常に良好な成長を示した。また肥満度も良いことから餌料環境も良いことが解し、

当磯場をアワビの漁場として本格的に造成していくこととなった。平成9年以降のアワビ種苗の放流数は平成11、12年にそれぞれ5,000個、13年に2,000個、14年に2,000個、15年は「タカオレ」と周辺の磯に合わせて8,000個、16年も同様に3,000個放流し、資源の増大を図っている。

平成13年からは漁場造成の実証のため、放流したアワビの漁獲試験も開始した。漁獲したアワビのうち殻長9.5cm以上については販売に供し、価格調査も行った。毎年の販売数量と金額等は、平成13年が30.5kgで192,100円（平均単価6,300円/kg）、14年は31.4kgで161,000円（平均単価5,120円/kg）、15年は83.1kgで475,700円（平均単価5,720円/kg）、16年は91.9kgで687,000円（平均単価7,470円/kg）と毎年漁獲量が伸びており、漁業として確立できる可能性が高まっている。

また、平成13、14年に部員のうち9名が潜水士の免許を取得し、今年度からは漁獲調査や放流試験などを自主的に行えるようになった。さらに平成15年の春にこの9名で採捕会を結成、磯根資源の利用、管理等を主体的に行うことになった。現在のところアワビ資源については、青壮年部管理のもと年数回の採捕で水揚げも青壮年部が管理している。しかし、昨年から採捕会がさらなる漁場拡大を目指して「タカオレ」周辺の磯の調査とアワビ種苗放流試験を実施している。今年の調査では、昨年新たに放流した磯でアワビが確認され、ここでは約1年で殻長が20mm以上も成育していた。現在、これらの試験結果に基づき、水産試験場や水産事務所の協力を得て勉強会を開催し、漁場の面積や藻場の状態、アワビの生残率などから資源管理のシミュレーションや種苗放流から採捕までの投資効果のシミュレーションなどを行って、最も効率的な操業体制を検討中である。一方、未利用資源の活用についても積極的に取り組み、今漁期のナマコ漁では1日6万円以上の水揚げになる部員もいた。このナマコ漁についても先進地へ赴き資源管理手法などを学んできた。

漁場が移動しない磯根漁業は、他の漁業に比べ漁獲圧がより資源へ影響するものと思われる。新地地先の磯は、いわき地区などと比較して漁場が非常に狭く、資源枯渇の危険がはらんでいる。しかし、アワビの成長は非常に良好で毎年漁獲調査でもその量が伸びていることから、計画的な放流と秩序ある操業を行えば、漁業としての確立は可能と思われる。また、既に漁を行っているウニ、ナマコなどについては、これまでどおり移植や数量制限など計画的に管理を行っていけば今後も継続していけるとと思われる。アワビ漁についても資源管理の技術を身につけ、漁業として確立すれば新地の磯根漁業は幅を拡げ、漁業経営に貢献できると思われる。

5. 波及効果

今回の取り組みによって、新地地先にアワビ漁場を形成させ、拡大することが出来た。また、潜水士の免許を取得し操業できるようになったことで、ナマコ漁にも従事でき新たな資源開発が行えた。

6. 問題点と今後の対策

昨年度から採捕会が中心となって、「タカオレ」以外の漁場を探索、造成中である。しかし、漁場は「タカオレ」とその周辺数十m四方ほどの磯に限られており、多数の漁業者が

長い期間アワビ漁業に従事するのは難しい。計画的な種苗放流と採捕と漁場の管理を行い、またウニ、ナマコなどそれ以外の資源利用も含めた総合的な磯根資源の利用によって水揚げ金額を伸ばしていくことを検討し、新地磯漁業の定着を図っていく必要がある。

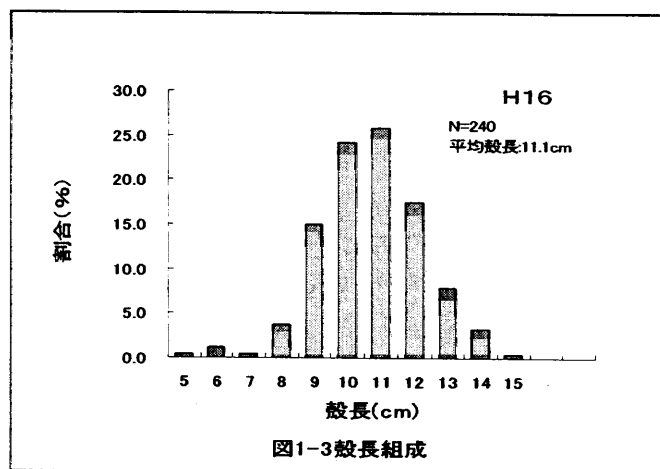
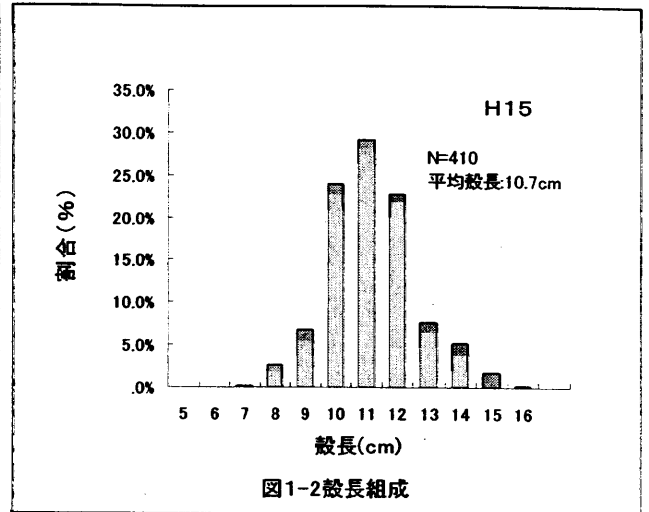
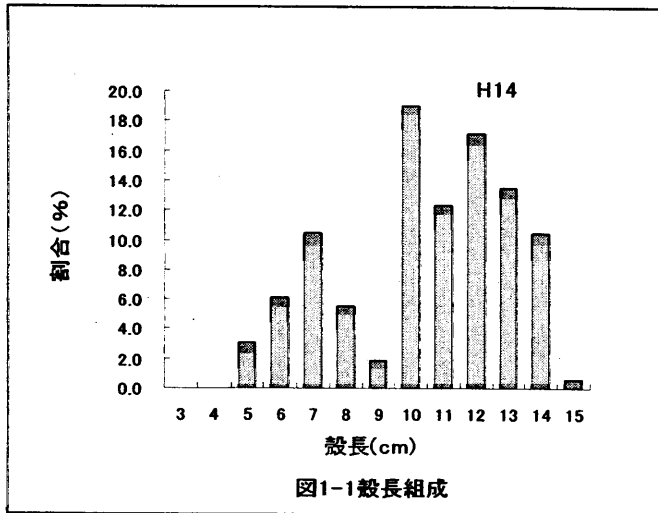


図1 漁獲調査時の殻長組成

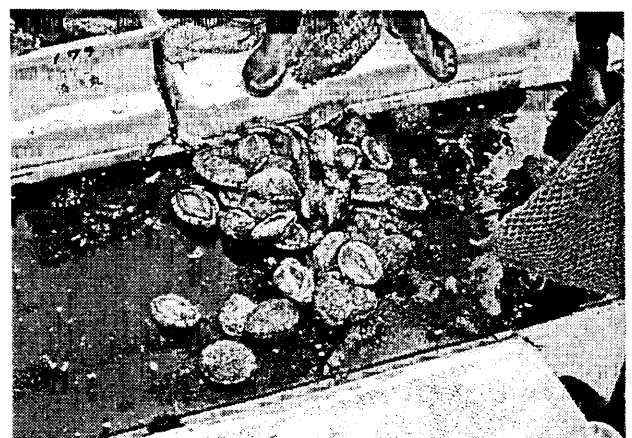


図2 青壮年部による漁獲調査